



こころに、学びを。

STORIES 2021

「ここに、学びを。」を伝える、
「ころ」をうごかすエピソード。

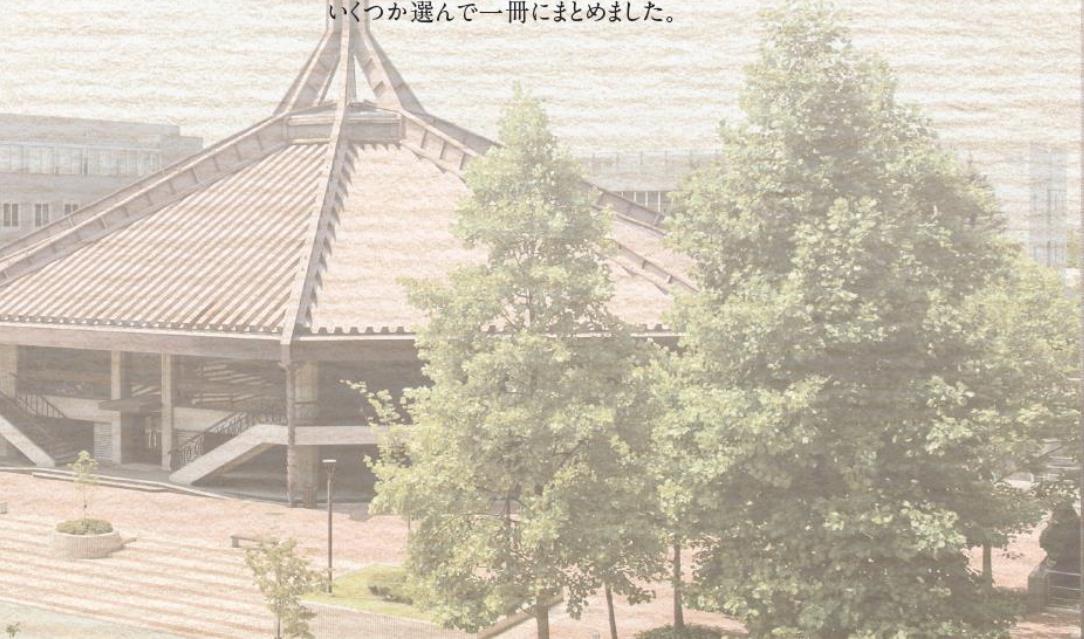


多様な社会に生きる中で、
お互いの違いを理解し、受け容れ、調和していく。

相手を尊重し、自らを高めていくには、
すべての人々に向ける「こころ」が必要です。

四天王寺大学では、聖徳太子の教えである
「和の精神」「利他の精神」を原点に、
「知識・技術を修得する学び」に加えて、
「こころに、学びを。」という想いも大切にしていきたい。

そんな想いのもとに、
四天王寺大学の学生たちの
こころにまつわるエピソードの中から
いくつか選んで一冊にまとめました。



学園訓

一、和を以て貴しとなす

一、四恩に報いよ

四恩とは

国の恩

父母の恩

世間の恩

仏の恩なり

一、誠実を旨とせよ

一、礼儀を正しくせよ

一、健康を重んぜよ



STORIES 2021

- > アルバイトでのひとこま
- > 勇気をもって誰かの役に立つ事から得た自信
- > 笑顔と会話で心に花を…
- > 痛感
- > 幸せの連鎖
- > 見返りを求める行動の温かさ
- > 思うこと、行うこと
- > 親切・笑顔・幸せのバトン
- > 母は偉大
- > 思いとどまって生まれた誇り
- > 臨機応変な思いやりとは
- > スーパーマーケットでの気づき
- > 手助けをしたつもりが教えてもらったこと





アルバイトでのひとこま

ある日、私がアルバイトでレジ打ちをしているときに車椅子のお客様がレジに並ばれました。レジの通路の間は非常に狭く、車椅子で通るには困難だと私は思い、すぐにお客様から一番近いレジに移動し、そこでお会計をしました。また、レジは車椅子のお客様から見れば少し高い位置にあるので、商品を渡す時はレジを出てお客様に直接手渡しをさせてもらいました。

私自身は、接客として当たり前のことを行なうだけだと思っていましたが、そのお客様は、アンケートで私の名前を挙げてくれました。アンケートには「本当に優しく対応してくれた。車椅子での買い物は大変だけど、この店にはまた来たいと思います。ありがとうございました。」と書いてくださっていました。さらに後日、そのお客様は再度来店して、わざわざ私を見つけて直接感謝を述べてくださいり、本当に自分のとった行動を誇らしく思うことができました。

行動を起こした際、お客様にとってはかえってありがた迷惑ではないだろうかと一瞬頭によぎっていたのですが、勇気を持って相手のためを思って行動することができて、本当に良かったと思います。これからも学園訓である誠実さを持ち、真心で行動していきたいと思います。



勇気をもって誰かの役に立つ事から得た自信

この日は、梅田駅から私の友人の最寄駅に行くバスに乗っていました。初めて乗るバスだったので、クリスマスシーズンだったからか紙袋を持った人で満員でした。優先座席には、サラリーマンの方や買い物帰りのような若い人たちが座っていて、荷物を両手に持ち立っているお年寄りの方に気づいていませんでした。私は、こういう場面に遭遇したら席を譲りたいと思っていたのですが、いつも変にためらってしまい、何もできずにいつも後悔していました。

しかし、本学に入学してからその思いが強くなり、この日は思い切って声を出し、席を譲ることができました。たくさん人がいる中で声を出すことは非常に勇気がいましたが、お年寄りの方が笑顔で「ありがとう。」と言ってくれたので、数分前までの緊張は消え、非常に嬉しい気持ちになりました。

この経験から、誰かの役に立つことは、時には勇気がいますが、相手の方だけでなく自分も良い気分になるということに気づきました。そして、いつもためらっていた自分でも、やればできると自信になりました。これからも公共交通機関を利用する機会は多いので、またこういった場面に遭遇したら、次はためらわず率先して席を譲ることができる気がします。



笑顔と会話で心に花を…

アルバイト先でのエピソードです。

フィットネスジムのインストラクターのアルバイトでは、お客様と接する場面がとても多く、トレーニングが終わると必ずお客様と会話をします。最近は、新型コロナウイルスのニュースが多いため、それに関連した会話になることがあります。その時のお客様の表情は決して良いものではありません。私は、お客様に笑顔で帰っていただきたいので、なるべく明るい話をするように心がけています。例えば、私の成人式の前撮りのことをお話したり、その写真をお見せしたりすると、「楽しい話が聞けてうれしいわ」とみなさんとても喜んでくださり、楽しく会話をしてくださいます。私自身もすごく嬉しくなります。

心がけひとつで、人を明るく楽しくさせ、心に花を咲かせることができると改めて感じました。暗い世の中だからこそ、明るい会話や楽しい会話を楽しみにする人が多いように思います。これからもまわりの人を笑顔にできるよう、頑張っていきたいです。

人文社会学部 社会学科



痛感

私が自分の働くレンタルビデオ店でいつものようにレジをしていたとき、ひとりの男性がやってきた。わたしはいつものように挨拶をして、商品を受け取り、カードの提示をお願いしたところ、何やら聞こえていなかったようで、もう一度声をかけた。すると、男性はこちらに気づき、手話でもしかすると私に分かりやすいように、ただの身振りをしただけかもしれない）自分は耳が聞こえないことを私に教えてくれた。私は自分が福祉科の学生であるにも関わらず、何も分からなかつたことに少し情けなさを感じたが、男性の笑顔でそのことを教えてくれた姿を見て、申し訳ないということを身振りと同じように少し悔しさが混じった笑顔で男性に伝えた。

そのあとはスムーズに会計が進み、会計が終わると、男性は笑顔で手話の「ありがとう」をして帰っていかれた。私は清々しさとその中に少しの悔しさを感じた。

まず、実際にいきなり障がいを持った方にあっても、見ただけではわからないことがあることを身をもって体験した。

また、障がいを持った方に対して、常に自分から色々と働きかけ、助けてあげるものだと思っていた。しかし、この男性との出会いを通して、自分が思っている以上に私たちと障がい者は対等にあるべきで、私たちがさまざまな援助を行い、そして障がいの方も私たちに大切なことを教えてくれる、そんな関係であることが必要なのかもしれないと思った。



幸せの連鎖

「ありがとう」という言葉を私達は1日のうちに何回伝えられているでしょうか。大学生になるにあたって、自分の行動に責任を持つことを意識するようになった私は、この1年小さなことでもやってもらえて当たり前だと思わず、常に感謝を忘れないことを目標にして生活してきました。感謝を忘れないことは一見当たり前のように感じられるかもしれません。ですが、その当たり前の行動を当たり前に実行出来ている人はそれほど多くはないのではないかと感じます。

友達が先生に提出するプリントを自分の分と一緒に持つて行ってくれたときや食堂で私の席を空けておいてくれたとき、車で送り迎えをしてくれたときなど、ついつい感謝の言葉を忘れてしまいそうな小さな場面でも意識して「ありがとう」という言葉をかけることで周りにいる人の大切さやしてもらっていることのありがたさを改めて感じ、私は周りの人に恵まれて生活できていることを実感することができました。「ありがとう」という言葉は言った人も言われた人も気持ちの良い言葉です。「ありがとう」と言われると嬉しい気持ちになるので、なにかしてあげたいという気持ちになり、それがまた「ありがとう」を生み、繋がっていくことから私は「ありがとう」と伝えることは幸せの連鎖に繋がっていくと感じました。私はこの幸せの連鎖を止めないように、また誰かの幸せを新たに作っていくことができるよう、これからも「ありがとう」を伝えていきたいです。



見返りを求める行動の温かさ

私には2歳年上の姉がいます。姉はとても温厚な性格で、わがままな私にも優しく、たくさんの愛をもらって私は育ちました。

大学進学のために東京に出た姉が帰省した際に、姉の行動の一つ一つに優しさが詰まっていることに気がつきました。例えば、ご飯をレンジで温めるときはまず中学一年生の妹の分、次に私の分、そして母の分、一番最後に姉自身の分を温めていました。しかもそれを、見返りを求めずに当たり前にこなしてしまうのです。

確かに大人としては当たり前にすべきことなのかもしれません、私なら、本音を言える家族の前では「ありがとう」の言葉が聞きたくてアピールしてしまうだろうと思い、見返りを求める行動の温かさを感じ、それと同時にそれはとても難しいことだと思いました。

私が「ありがとう」と言うと、姉は照れくさそうに「こんくらい当たり前やわ。」と言います。私も姉のように無償の愛を注げる人になりたいと思います。

教育学部 教育学科 幼児教育保育コース



思うこと、 行うこと

先日、大学から家に帰る途中、JR天王寺駅で電車を乗り換えるときに、周りをきょろきょろ見回している人がいました。その人は何度も携帯電話を見たり電光掲示板を見たりしていたので乗り換えに困っているのかなと思い、ちょっと迷いましたが思い切って声をかけました。その人は中国か韓国から来ている人のようで、私の日本語が全部は分からぬようでした。また話す時も単語を並べるだけだったのですが、見せてくれた携帯電話に「大阪」という文字が見えたので、大阪に行きたいのだということが分かりました。

日本語では説明しても分かりにくいかなと思い、乗り換えるホームまで一緒にいきました。電車が来るのを一緒に待っているときに「ありがとうございます。」と何度も言ってくれました。その時に「声をかけてよかったです」と思いました。思い切って行動すると、何か他人の役に立てることがあるんだなと思いました。これからも困っている人を見かけたら、進んで声をかけようと思います。



親切・笑顔・幸せのバトン

この日は、お昼ご飯を食べるため車で出かけました。母が運転をしていたのですが、反対側の歩道にシルバーカーを押したおばあさんが買い物を終えて歩いていました。車の中で信号待ちをしていた時、そのおばあさんの買い物袋から、商品が1つ落ちてしまったのです。おばあさんはその事に気づいていません。周りの人も拾ってあげることをせず、無視です。私は、「あ! 大変」と、とっさに体が動き、母に言って車から降り、反対側の歩道へ走っていき、落ちた商品を拾っておばあさんに届けました。すると、おばあさんは笑顔で「あら、ごめんねー。わざわざありがとう。」と言って、買ったばかりのリンゴを1つ私にくれました。袋をしっかりと固定してあげた後、そのままおばあさんはシルバーカーを押しながら、家まで帰っていました。

高齢者の方の中には、シルバーカーや杖などを使っている人も多く、足腰を痛めている人もいらっしゃるため、しゃがむことが困難な人が多いと言われています。物が落ちてしまても耳が遠くなっていると気づかないこともあります。周りにいる人が、その事を理解して高齢者の方に優しく接することで、高齢者の方も生きやすい世の中になるのではないかと思いました。

私は今回の経験から、商品を拾って届けてあげることで、おばあさんに「笑顔」が増えることに気づき、その「笑顔」がおばあさんの毎日の幸せな出来事に繋がっていることを感じました。人間の親切な優しい心は相手を幸せにするということに強く気づかされました。



母は偉大

私の家族は父と母、そして4人兄弟の6人家族です。両親は共働きで、父はいつも朝早くから仕事に行き、母は仕事をしながらも全ての家事をしていました。コロナ禍でも、父と母はいつもと同じように仕事をし、母は全ての家事をしていたにも関わらず、私はほとんどの時間在家で、ダラダラと過ごしていました。

そんな生活が半年以上過ぎた頃、母が仕事と家事の疲れから体調を崩し、年末を前に倒れてしまいました。幸い命に別状はありませんでしたが、母をここまで追い込んだのは私ではないかと思いました。母は仕事と家事をこなし、毎日家族のために働いているのに、私は何もせずにダラダラと過ごして、今思えば本当にひどかったと思います。母が倒れ、こんなことが2度とないように、子どもの私たちにできることは自分でやり、母の負担を減らすために家事を手伝うようになりました。

家事をして、初めて、こんなにやることの多い家事を毎日やっている母はとてもすごいと思いました。手伝うといってもそんなに大したことはできていないのに、母は「ありがとう。」と言ってくれます。本当は私たちが毎日「ありがとう。」と言わなければならないはずです。それなのに私たちに感謝してくれる寛大な母を尊敬します。

母は偉大。これからも家の手伝いを続けていきたいと思いました。みんなも親を大切にして、助けることができる人になって欲しいと思います。



思いとどまって生まれた誇り

ある日、私は祖母の家を訪ねたが祖母が留守であったため、帰ろうとした時、祖母の隣人で尿道カテーテルを使用している80代の男性から声をかけられた。その男性は、いつもなら採尿パックに尿が溜まっていても良い頃だが、今日はずっとパックが空のままで不安なため、かかりつけの病院に行きたいとのことだった。

話を聞いていくうちに男性は難聴と認知症のようで、病院の名前や自分の名前が分からなかったり、会話のかみ合わないところが多くあった。そこで、私は看護実習で学んだコミュニケーションの方法を思い出しながら、その男性と会話を続け、彼のかかりつけの病院へと連絡し、送迎サービスに迎えに来てもらうことができた。

男性にはとても感謝された。始めのうちは男性の言っていることがよくわからず、適当な理由をつけてそこから逃げ出そうかと思ったが、自分が看護に携わるものであるという責任と自覚を持たなければならないと思いとどまり、利他の精神で接することができたと思う。男性や、病院の方に感謝されたとき、自分に誇りが持てたように感じたと同時に、より多くの困っている人を助けたいと思うようになった。



臨機応変な思いやりとは

私は、飲食店でアルバイトをしています。ある日20代ぐらいのお母さんが2人の子どもを連れて食べにきました。子どもの1人はまだ乳児で、料理を提供する前に泣き出していました。もう1人の子は3歳ぐらいでした。下の子の泣き声につられたのか、何か悲しくなったのか、上の子も泣き出てしまい、お母さんはとても困った表情で泣き止んでもらおうと必死でした。

お子様セットを頼まれていて、そのセットにはお会計時におもちゃをお渡しする制度がありました。私は何か出来ることはないか考え、「先におもちゃをお渡ししましょうか?」とお母さんに聞いたところ、お願いしますとのことだったので、上の子におもちゃをお渡しました。それから泣き止んでくれて、提供されたご飯を美味しそうに食べていました。

たまたま泣き止んでくれただけかもしれません。しかし何か自分にできることがあるのなら誠実心を大切に行動しようと感じました。

短期大学部 保育科



スーパー・マーケットでの気づき

私は、食品を中心としたスーパー・マーケットでアルバイトをしています。ある時、1人で押し車を押したおばあちゃんが買い物に来ました。そのお客様は身体の具合が悪いようで、とてもしんどそうに歩いていました。私が駆け寄って聞くと「ヘルニアで腰が悪い」と言います。私は「和の精神」の授業で学んだ「利他の心」をとっさに思い出し、お客様が買いたいものを聞いてその押し車に入れ、その流れでレジ打ちから袋詰め、そしてそのお客様の押し車から落ちないようにガムテープで固定などをしていました。

この対応はスーパーのマニュアルにもないことで、私は大学で「和の精神」を学び、自然と体が動いて結果的にお客様を助ける行動をしたのですが、そのことでお客様が涙を流して「助かったよ、ありがとう。」と、おっしゃったときに「この授業を受けることができて本当に良かった」と感じました。そして「助かったよ、ありがとう。」など言われて人の為になることをしたら、自分も「助けられて良かった」と思いました。

困った人を助けることは当たり前ですが、それができるのはとても良いことだと思いました。人を思いやるのは大切だということが学べ、そしてこのように、自分自身もすがすがしい気分になれ、心も穏やかになれることに気づきました。



手助けをしたつもりが教えてもらったこと

ある日、登校しようと家を出ると、白杖（はくじょう）を持った視覚障害の方が車道の真ん中で立ち往生されていた。車道側の信号が青になりかけており、私の隣にいた女性が「危ないよ!」と声をかけられたが、その方はキヨロキヨロとして戸惑っている様子だった。このままでは車が来てしまうと思い、その方の所へ駆け寄り「ここは車道です。一緒に歩道まで行きましょう」と声をかけて誘導した。歩道につくとすぐに「今日は日当たりが良くて地面の白い線が見えなかったんですよ。」と言われた。白杖を持っておられたので、てっきり全く見えない方だと思っていたが、少しは視力がある方なのだと気づいた。そして、駅まで行かれるということだったので一緒に歩こうと、白杖側に立ってサポートしようとすると、反対側にきてほしいと言われた。そこで、「白杖側から介助すると、ご本人が白杖を使えない」ということに気付かされ、自分のうっかりに反省した。駅に着き「ありがとうございました。」と言われたが、こちらこそとお礼を言い見送った。

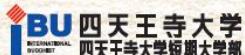
この体験を通して、視覚障害の方の歩行を手助けしたつもりが、白杖の使い方や歩行介助について、また、自分の思い込みに気付くことができた。

自らの考え方や行動に影響を与えた、
いくつかのエピソード。

読んだみなさんのこころに、
私たちの想いが届きますように。

四天王寺大学はこれからも
「和の精神」「利他の精神」をもとに、
「こころの学び」の大切さを伝えていきます。

こころに、学びを。



〒583-8501 大阪府羽曳野市学園前3丁目2-1
TEL.072-956-3183(入試・広報課直通)
TEL.072-956-3181(代表)
<https://www.shitennoji.ac.jp/ibu/>